

令和8年度版「学力向上ポータルフォリオ(学校版)」【与野南中学校】

学力向上
アクションマップ

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する 資質・能力	(1)「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して、各教科の知識・技能の定着を図るとともに、生徒が自ら課題に取り組み、自身の学びを自走させる力を育む。 (2)「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して、各教科における「見方・考え方」をはたらかせ、知識を生活の中や身近な事象と結びつけながら活用したり、自分の考えを文章やまとめ発表したり、思考を深めながら知識を活用するスキルを身に付けさせる。
↓	
実施する学力向上策 【時期・頻度】	(1)について、教科と単元の特性に応じてTDL(Time to Deepen your Learning:学びを深める時間)型授業を取り入れ、学びの過程や理解したことを把握し振り返る機会を設け、自己評価を積み重ねながらステップアップを実感できるような授業改善を進める。【年間を通して実施】 (2)について、話し合い活動やタブレット端末上での意見共有ツールを活用した協働的な学びの機会を設定し、「学び方」を学ぶ指導を継続的に行うことで、生徒の学びの自走を図る。【年間を通して実施】 (2)について、生徒が多様な思考に触れるため、TDL(Time to Deepen your Learning:学びを深める時間)型授業における生徒同士の協働的な学びの機会を積極的に設定する。【各教科が決めた単元で実施】

⑤	年度末評価	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握) 職員会議・校内研修会
↓		
今年度の成果と 次年度の課題	結果提供(2月)	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一步)

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
↓	
結果から考えられる 児童生徒の実態	①学校全体での取組 ②単元テスト・定期テスト 等の分析・活用 ③中間評価を経ての取組 ④調査結果を活用した授業

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	令和8年度全国学力・学習状況調査において、英語では、日常的な話題について必要な情報を聞き取る力が全国平均を下回り、読むこと・書くことの観点ではすべての問題において全国平均を上回る結果となった。国語では、概ね全国平均を上回ったが、言葉の特徴や使い方に関する事項の、特に語感・語彙に関する事項で全国平均を下回るなど、課題が見られた。数学では、県と全国平均をトータルでは微重ながら上回った。しかし図形の分野など平均に近い結果に課題も見られた。
↓	
結果から考えられる 児童生徒の実態	英語では、TDL型授業において、教科書を読んで自分の考えを書いたり、内容をまとめるタスクに対し積極的に取り組む生徒が多いが、生成AIなどを活用し、聞く活動を読むことの力で補いながら学習を進めている場合があると考えられる。国語では、TDL型授業において、生成AIを活用しながら思考・判断・表現の力を深める一方で、学びの土台となる知識・技能、特に語感・語彙といった部分を、AIに依拠して学習を進めている場合があると考えられる。数学では、TDL型授業において自分で課題を探し、演習を繰り返し理解を深めるように進めている。結果、習熟度の高い生徒は更に理解を深められているのではないかと考えられる。理解度の低い生徒が同じように進められるようにするのが今後の課題であると考えられる。

③	中間評価
学力向上策の 実施状況	評価(※)
	B
↓	
学力向上策の 見直し	英語では、TDL型授業の中で、生徒自身で考える時間をより多く設け、思考を深めながら知識を活用するスキルを身に付けさせていく必要がある。 国語では、授業内で生成AIを活用する場面/しない場面をより明確に示すと共に、自らの語感・語彙を相対化する手段として、他者との対話やAIの利活用を再度定めていくことが必要である。 数学では、TDL型授業の中で、教科の「見方・考え方」を深められる課題を設定して生徒の学習を深めていきたい。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一步)

教育研究所